

地域調査のすすめ

北海道大学大学院文学研究科 地域システム科学講座
教授 宮内泰介

民主党政権は、「コンクリートから人へ」という政策を打ち出した。「コンクリートから人へ」というのは、道路や箱物の公共事業で国を発展させるという古いやり方から脱し、人々の生活の実情に応じた財政支出、あるいは人そのものへの投資によって社会を発展させようという考え方だ。私もこの方向は正しいと思う。

しかし、悩ましいのは、人々は多様であるということだ。コンクリートはどこでもコンクリートだが、人はそれぞれ違うし、地域もそれぞれ違う。それぞれの地域で何が求められているか、何が必要か。それをちゃんと見据える必要がある。

上からお達しがあってそれを進める、という形ではなく、それぞれの地域の、できれば一人ひとりに寄り添った施策が求められている。

JAも自治体も「視察」が大好きだ。確かに先進事例からわかることは多いし、先進地から学んだり元気をもらったりすることも大事だろう。しかし、足下の地域に実は面白いことがたくさん眠っていることも多い。地元や近隣の地域から学ぶことを、まずは、してみよう。地域の調査からボトムアップに考えていくというやり方が、これからの地域経営の基本だ。

ところで「地域調査」というと、アンケート調査を思いうかべる人が多い。なるほど、アンケート調査は、広く意見を聴取したり、一度に多くの情報を得たりすることには長けている。しかし、そうした調査で本当に地域のことわかるだろうか。

アンケート調査に代わって私がおすすめするのは、聞き取り調査であり、フィールドワークである。

聞き取り調査は、話を聞く、という実に単純な調査だ。しかし、この単純な調査は、たいへん多面的であり、また、問題発見・問題解決に向いている。

聞き取り調査は、第1に、あらかじめ問題が決められていない状態から出発できる。アンケート調査は、あらかじめ問題を決めなければならない。問題を決めてから、それについて質問を決め、それにしたがって聞く。それに対し、聞き取り調査は、聞く中で問題を発見していく。もちろん何も準備なしで聞き取り調査を始めるわけにはいかないの、あらかじめ準備はしていこう。しかし、それらの想定はたいてい外れ、話は一見あらぬ方向に向かう。しかし、そこからこそ、地域がかかえる問題がすどく浮かびあがってくることもある。

聞き取り調査は、第2に、さまざまな方向

の調査に対応している。たとえば、日本自然保護協会が現在進めている「人と自然のふれあい調査」（筆者も参画）は、地域の人たちがその自然とどうかかわってきたかを聞き取り調査で明らかにし、それによって地域の自然の価値を測ろうとする調査だ。地域のお宝（地域資源）を掘り起こそうとする試みも各地で行われるようになってきている。これも、基本は聞き取り調査になる。調査テーマはもちろん自然や地域資源に限らない。地域がかかえるさまざまな問題もまた聞き取り調査のテーマである。たとえば、「後継者問題」に関して調査をするにも、聞き取り調査を使えば、一般的な「後継者問題」ではなく、個々の農家の実情から考える「後継者問題」が浮かびあがってくる。それはもはや「後継者」問題とは言えない、別の問題として浮かびあがってくるかもしれない。それが地域調査の醍醐味である。老人たちの聞き書きも、地域を見直すには有効だろう。老人たちの話をテープにとり、それを起こす。聞き書きは、中学生・高校生の地域教育にも適している。

聞き取り調査は、第3に、いくつかのバリエーションがある。1対1でじっくり聞く聞き取り調査、現場を歩きながら聞く聞き取り調査、あるいは、何人かに集まってもらった上で行うグループインタビュー。グループインタビューでは、聞かれる側もお互い話したことに触発されてさまざまな話題を出すことができる。聞き取り調査を中心に、歩いたり、体験したり、ということを加えると、もはや

それは狭い意味での聞き取り調査を超えて、「フィールドワーク」ということになる。

フィールドワークにはさまざまな要素が詰まっている。発見、出会い、歴史のふりかえり、問題解決への糸口。フィールドワークや聞き取り調査は、ひとり研究者のためのものではない、市民みんなのものだ。市民がフィールドワークを試みることで、今後の地域、今後の世界が見えてくるはずだ。

そうやって調べたこと、わかったことは、記録しないと消えてしまう。記録して、できれば地域全体で共有するようにしよう。

記録された聞き取りデータは、当たり前だが、言葉によるデータである。地域の「問題」も「お宝」も数字では表せない。その多くは言葉という形で浮かびあがってくる。数字データは、グラフなどにまとめることができるが、言葉によるデータ（「質的データ」という）は一見まとめにくい。しかし、一見まとめにくいことと、それを活用できないことは違う。まとめにくいから、そこは宝の山なのである。その宝の山を宝の山として活用するためには、データとちゃんと対話する必要がある。ここでも柔軟な目が重要だ。調査や分析によって柔軟な目が養われる。

さて、あなたの町の地域調査からは何が生まれるだろうか。

（みやうち たいすけ）